

ねまづな芸



Wagyu 07

沼津市芸術祭 第45回 文芸部門作品集

入 選

三社祭

新宿区（東京都）

佐藤 学

三社祭の神輿を担ぐのは今年で三度目である。毎年五月、三社様はそれぞれ三体の神輿に移られて渡御する。宮神輿、町神輿、昔は船神輿も登場した、一昨年から神輿担ぎを始めた私は、最初の年だけで神田祭、深川の水掛祭り、そして三社祭に参加し、地方出身の身ながらすっかり江戸っ子の気風に染まってしまった。中でも三社祭は、江戸三大祭りの格式が高い神田祭、山王祭、深川水掛祭とは違い、氏子たちの様相が江戸の町人そのものである。

浅草の駅を降りてまず驚いたのは、祭に参加する男衆の多くが下帯（褌）を締めていたことだ。俗に締め込みと言われるだけあってかなりきつく締めあげているから、尻のほとんどが丸見えだ。それがダボシャツや絆纏の下で誇らしげに存在を主張している。正直、目のやり場に困るが、男衆はここぞとばかりに雪駄を鳴らし、栄養たっ

ぷり詰まった肉塊を揺らすのである。

さらに驚いたのは、紋々（入れ墨）衆の登場だ。マル暴対策法成立以来、表向きは世間を追われ、昨今はなかなか見ることの無かったその筋の方々は、こういう祭の舞台でしっかりと息づいていたのだ。以前はいろいろと悶着を引き起こし、祭の存続が危ぶまれたこともあったようだ。紋々組は参加を禁止されていたと思うが、昨今はペイントで俄かタトゥーを施す者もあり、本物と区別をつけるのが難しいのかもしれない。何でも有りなのだ。

褌に入れ墨とくれば、江戸の大名に博徒だ。いま私の目の前を闊歩していったのは、大工の伊之助に寄り目の弥平だ。

かつては吉原芸者も神輿を担いだという。氏子の女たちも結い上げた髪に折り目の付いた鉢巻を粋に巻いて、町屋の女衆に成り切っている。寒天問屋の女将お浜と吉原芸者の菊乃だ。そんな氏子たちの様子を見てみると、江戸情緒、というよりは、市井の町人たちの勇壮な日常がそのまま彷彿とさせられるのだ。

今回も知り合いの伝手で神輿を担ぐことになった私は、職場の仲間と共に、江戸の町名猿若（現浅草六丁目）が勘亭流文字で染め抜かれた絆纏を羽織って、神酒所に到着した。

祭の行事には「待ち」が多い。その日も大いに待たされた。やっと町神輿を担ぐができたのは、神酒所に着いてから二時間も経過してからだ。担ぎ手たちは今か今かとその時を待ちながら、腹の中にはち切れんばかりの気魄を溜め込んでいる。その間、神輿はウマと呼ばれる台の上に鎮まり置かれている。

時は来た。用意した手拭いを右の肩にあて、担ぎ棒にとつく。神輿を引率する元締め若い男が拍子木を鳴らして一本締め、それを合図に老若男女が一斉に神輿を担ぎあげる。神輿の花形は、最前列の花棒担ぎだが、私は比較的身長が高いのでいつも神輿の後方で担ぐことになる。この位置はどちらかというと損な役どころで、神輿の重みが集中するところでもある。しかしその重み、半身にズーンと沈む感触が病みつきのもとだ。痛みを超えた快感が肺腑の奥で轟く。肋骨の配列が歪み、いびつな感触が背骨を通して伝わってくる。そこへ囃子屋台が笛太鼓の音を響かせれば、途端に私は高揚し、荒くれた江戸の担ぎ手に変貌する。

「せいやッ」「せいやッ」

「せいやッ」「せいやッ」

伊之助や弥平と同じ、江戸市井の町人に生まれ変わる。坊主頭の前頭部だけに髪を残し、禪姿に赤い鉢巻を巻

いた小男は、幫間の熊吉だ。奴は神輿が左右にぶれないように、横からトンボ（神輿の親棒と脇棒をつなぐ横棒のこと）を押す役だ。体が小さいせいか紅潮した顔を汗だくにひきつらせている。生っ白い尻をぎゅうと締めて荒ぶる神輿を必死で抑えている。

職場の女子と交代して私が抜けている間、僅かに神輿の後方が危うくなった。そこが女衆五人だけになったのだ。ところが、すかさず一人の若い男が女衆の後ろに回り込み、一気に五人の女をぶら下げた。神輿は息を吹き返し、女たちは嬌声をあげる。大工の伊之助だった。なるほど、少しにやけた横顔はいかにも絶倫の相だ。

神輿は馬道通りを練り、いよいよ浅草神社に近づいた。ここからが佳境だ。

浅草はそれだけでなくとも東京名所だが、雷門から仲見世を経て浅草寺、そして浅草神社への一帯は、我々担ぎ手とそれを取り巻く見物人で締めき合っている。先ほどから我々の神輿に向かってひっきりなしに一本締めしている白人の夫婦は、この瞬間に立ち会えた幸運に浮かれている。せいや、せいやのリズムに合わせてダンスする黒人の女もいる。彼らには我々の乱舞はどう映るのだろうか。外国人たちの、我々とは違う祭りの解釈が、また一つ色を添えているのだ。

寄り目の弥平はどこへ行つたかと思つたら、神輿の前に群がる見物人を追い払つていた。

「ジャマだジャマだ。退けてんだ。」

江戸の言葉は汚いと相場は決まつている。

「オイ、お前えだよ、お前え。そんなところで自撮りしてんじゃねえ、おら。シツシツ。」

私が勝手に寄り目の弥平と名付けたこの男は、出で立ちが最も板についている。浅草の町も、粗削りな祭りの風情も、弥平のためにあるようなものだ。奴は博徒だ。日がな一日さいころを振っているのだらう。日頃、浮世の崖つぶちを歩いている者の渴いた業を漂わせている。

勝手なことを想像して、じゃあお前えは何なんだよ、と弥平に詰められそうだ。そうさな。例えば、指物職人か。いやいや、そんな立派なもんじゃない。さしずめ、役者くずれの禄でなしといったところだらう。昼間っから長屋の隅で呑んだくれては、昔の自慢話で管を巻く。そのうえ金の無心は茶飯事ときたもんだ。

さあさ、神輿は三社様の御前に到着だ。いよいよ棒は奪い合いとなる。ここで神輿を差し上げて棒に拍手を打つことが、三社様への帰依の証となる。そして幾許かの御利益に与^{あづか}らうと、限りある神輿棒に限度を超えた男女

がしがみつく。体を極限まで密着させて、上に下に右に左に揺れながら、一心不乱に乱舞する。私も棒から引き剥がされそうになりながら、必死に食らいつく。神輿は揉みあがる。

「せいやツ」「せいやツ」

「せいやツ」「せいやツ」

ここには男も女もない。恨みも妬みもない。過去の未練も浮世の憂さも、明日への不安さえ、すべてが砕け散る。その散りざまが華麗だ、花卉のごとく鮮やかだ。世間のことは分からない、明日の自分も分からない。分からないければ分からないほど、いや分からないからなこの気魄は増していく。分かっているのは、今ここに自分が生きているということ。まさしく生きているということ。担ぎ棒が肩に食い込む痛み、焼けて枯れた喉、これが命だ。これが祭りだ。神輿はのたうち回って、もんどりうって、それは市井に生きる我らそのものだ。

スカイツリーをバックに記念写真を撮る。祭りは終わった。純白だった足袋は、幾度となく踏みつけられてひどく汚れてしまった。足の裏は擦り切れて、腫れぼったく痛む。

伊之助も弥平も、善き父親に戻っていった。お浜と熊

吉は店の仕度に走り、菊乃は神輿の代わりに子供を抱いている。ふっと一刻垣間見た江戸の町は、もとの喧騒の都会に戻っていた。祭りは日常のケからハレに視座を移す日だ。それは時空を超えて、人々を別世界へと誘う旅の日でもある。

暮れなずむ街で、職場の仲間とビールに酔いながら、私は遠い江戸へ思いを馳せた。